

## 上腕左右の血圧値の違いが心臓血管病や死亡のリスクと関連

上腕で測定される収縮期血圧値の左右の違いが死亡や心臓血管病のリスクと関連することがこれまでの研究で示されている。本研究では 24 件の研究（参加者 53,827 例）を統合し、上腕収縮期血圧の左右差と心臓血管病および死亡リスクとの関連について解析を行った。

その結果、上腕収縮期血圧の左右差と全死亡および心臓血管死とに関連が認められ、左右差が 5 mm Hg 開くごとのハザード比はそれぞれ全死亡リスクが 1.05、心臓血管死リスクが 1.06 であった。さらに試験開始時に基礎疾患のなかった人では、3 種の心血管リスクスコアで調整後も、上腕収縮期血圧値の左右差が 5 mm Hg 開くごとに心臓血管イベントリスクの上昇が認められた。

今回の解析により、上腕の収縮期血圧値の左右差が 5 mm Hg を超えると心臓血管病死や全死亡、心臓血管イベントのリスクが上昇することが明らかとなった。心臓血管リスクの評価において、血圧は左右の上腕で続けて測定するべきであり、収縮期血圧値の左右差が 10 mm Hg を正常範囲の上限とすることが推奨される。

出典：Hypertension. 2021 Feb; 77(2): 650-661.